
泣き虫な魔法使い。

ゆう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

泣き虫な魔法使い。

【Nコード】

N5838Z

【作者名】

ゆう

【あらすじ】

持ち前の運の悪さを発揮し、一晩で家なき子になってしまった少女、ルイ。

落ち込んでてもしょうがないんで、まあ軽く世界をぶらぶらしてる間に

、人を救っちゃったりする話です。

いろいろと間違いどころが多いお話になりますが、よろしく願います。

プロローグ

プロローグ

夢を見た。

赤色に、彩られた世界。
自分を嗤う人々。

そんな中で、ふと、青年の背中が視界に映った。
血に染められた道を、ゆつくりと歩いていく彼。
見慣れた黒髪が、周囲を染める紅のせいで、異様に輝いて見えた。

そう、彼は大好きだった人。
・・・でも。

『助けて』
小さな声は、きつと彼に届かない。

『行かないで』
伸ばした手は、きつと彼に届かない。
それなら、こんな声なんていらない。
こんな体なんていらない。

・
・
・呼吸なんて、できなくていい。

プロローグ（後書き）

えーっと、ゆうです。はじめまして！

初心者がプロットなしで書いてみたものなので、
気楽に見ていただけるとうれしいです。

ちなみに、プロローグしょっぱなから重く始まりましたが、本編は
思いつきり軽いです。あほです。

よろしく願いします！

第一話「家、燃えちゃいました」

「真っ赤だなー」

目の前で「ぐっぐ」と音を立てる炎を見ながら、あたしはのんきにつぶやいた。

そうだねえ、とのんびりうなづきかけたおばさんが、我に帰って叫ぶ。

「いや、真っ赤だなーじゃないでしょ！ルイちゃん、あんた大丈夫！？なにも、怪我してない？」

「あ、はい。あたしは怪我してないよー。ぜんぜん平気ー。まあ、家は、もう跡形もないけどね」

冗談っぽく言っただけ、家がもう跡形もないっていうのはほんとうだ。

「ここらへんに、腕の立つ魔術師でもいれば、この火を消すくらいたやすいことなのに・・・」

人のことなのに、心底悔しそうに言うおばさん。その顔を見やれば、なんと、うつすらと目じりに涙を溜めていた。

それを見て、あたしは初めてぎょつとした。

「や、やだな、おばさん。泣かないで。家なくなっただけ、平気だって。お金は少しくらいならあるし」

「でも、そのお金が底ついたらどうするの？」

「そんなときは、努力と忍耐でどうにかする！」

あたしは、涙ぐむおばさんに向かってガッツポーズを作った。おばさんは、そんなあたしを見て、何を思ったか、いきなりつぶやいた。

「こうなったら・・・あたしが、ルイのために身体を売るとかでもなんでも・・・」

「・・・なんていうか、突っ込みどころが多すぎて、突っ込めなかったけど。」

おばさん、あなたもう五十歳だから。

結局あたしは何も言えずに、黙って炎の方を眺めた。

「・・・真っ赤だね」

十七歳のあたし、ルイは、本日、家なき子になりました。

第一話「家、燃えちゃいました」(後書き)

かなりマイペースな感じで始めました。ルイちゃんはたいていこな子です。

第二話「話し合い中」

「それにしても、ルイ、あんた、いったいどうすんのよ」

曰く、火事現場にいるのは危ないから、と。

おばさんの家に避難させてもらい、温かい飲み物を飲んでほっと一息ついたあと、ひどく心配そうな口調で言われた。

「うーん・・・なんとかするしかないからねえ。とりあえず、家にあるお金もってどっか平和そうな町に落ち着いて、なんとか仕事見つけるよ」

「あんた・・・職見つけるって、結構大変なことなのよ？」

「わかってるけど・・・」

ってか、わかってるしかいえない。職見つけるのはかなり大変だし、あたしみたいな小娘を雇ってくれるところなんてあるわけない、とも思う。

でも、あたしは身寄りもどこにもないし、生きていくためには自分で働くしか方法がないのだ。

「いざとなったら、護衛とか、警備とか、もしものときの盾がわりとしても雇わせてもらうよ。それに、当分の間暮らしていけるお金はあるし、ね」

それは事実だ。本当のことを言って安心させようと思ったのに、おばさんはすごく複雑そうな顔だ。

「だから、さつきも言ったけど、私の家で暮らしましょう。あなたのことは、私の子供のように思ってるの。だから、」

優しいおばさんの声を遮った。とてもうれしい申し出だけど、おばさんの事情を知っているこちらの身としては、うなづけない。

「おばさん家は、大家族だから絶対大変でしょ」

おばさん家には、八人の子供がいる。そこにあたしまで加わったら、食費がいくらになるのか・・・くわばらくわばら。

「だから、大丈夫だって！おばさんに迷惑かけられないし、すぐここから出てくつもりだし」

「もう少しここにいましょうよ。子供たちも寂しがるし。それに・
・あんたって、このままほっといたら死んじやいそうな気がするも
の」

「・・・あたしってそんなに頼りなくみえ」

「見えます」

「・・・」

沈黙になったあたしは、もう少し頼りになる人間になろう、と目
標を立てることにした。

第二話「話し合い中」（後書き）

ルイちゃん、さくさくとこれからの段取りを考えます。けっこつし
っかりしてる子なんです、・・・多分。

何気にけっこつ好きだったりします、おばさんのキャラ。

第三話「出発進行、こけこつこー」

「・・・ここらへんで、一回やすもつかなあ」

ずっと歩きっぱなしは、いい加減足が疲れる。道端で座り込んで、ぼーっとしてみる。

おばさん家を出て、六時間、たっただろうか。

あ、なんかいい、この香り。

朝の、この、日が昇って間もない感じ。どこかひんやりとしたこの匂いが、あたしはなんか好きだ。

「ここが・・・王都、か」

レイブレリッジ王国の王都は、店の準備にいそしんでいる商人たちでもうざわめいていた。

王都にきたのは、なんとなく、ではない。王都には、仕事がありあまっついていそうだったから。

・・・それに、王都には、なにかと怪しい話がついて回る。もし働く所がない場合は、そういう賞金首のやつらをぶったおして、お金をもらつこともできる。

・・・え、なにその、恐ろしい人を見るような目。冗談、だからね？いくらなんでも、あたしはそんなことしないからね？

か弱い、女の子だからね？

・・・と、誰にともなく言い訳しながら、あてもなく王都をぶらぶら歩く。今日は旅立ち記念で、なにか自分にご褒美でも買っちゃおうかなーと、のんきなことを考えた。

昼になると余計に町は盛り上がる。多分貴族なども多いのだろう、庶民的な衣装を着て市民に化けるのを楽しんでいる様子だ。

そんな人たちを横目で見ながら、ふと、おばさんたちのことをかんがえる。

おばさん、元気にしてるかな。子供たち、かわいかったな。これからは、しばらく会えないだろうな――

あ、なんか悲しくなってきた。やばい・・・

一人でぐずぐずと涙ぐんでいる少女の姿は、はたから見るとかなり変だったと思うけど、そんなことを気にしてられない。

「あ、ごめんなさー」

「邪魔だっ！」

怒鳴りつけられて、なんて血気盛んな若者なんだろうと、ある意味関心してしまった。男の顔を見ると、眉を全部剃っていて、いかにも不良って感じた。

しかも、その男が持っているのはなにかが詰まっているような麻袋。もう一人、出っ歯の男がいて、そいつも一個担ぎ上げている。

おし、ここで一回、状況を把握してみようっ

一、かなりあせった感じの男二人

二、二人とも柄が悪い

三、なにかが詰まった様な麻袋

状況証拠はばつちりだ、これはずばり・・・
泥棒、かな。

・・・うん？

これは、明らかに。
厄介ことですね。

めんどくさいけど、ほっとくわけにもいかない。あたしはすうっと息を吸うと、思いつきり大きい声を出した。

「すみません!!」

「なんだ、てめ・・・」

「眉毛、ないですよ?」

自分の眉を指差し、につこり笑っていったやると、男の口が面白いくらいにあんぐり開いた。

第四話「進化という名の退化」

「・・・ああゝ!？」

自慢の眉毛を批判された男は、面白いくらいに顔を真っ赤にして、怒りの声を上げた。

おお、ゆでだこみたい。

「おい、問題を起こさない方がいい・・・早く、逃げよう」

出っ歯の男は比較的冷静らしく、小声で眉毛男にささやいた。

いいね、その案には賛成。

こんなところで決闘して人に迷惑かけるのやだし、路地裏でもなんでも、けりつけてやろうじゃないの。

しかし、

「いや、許してやるもんか、この糞・・・!」

眉毛をけなされた怒りはかなりのものであるらしく、眉毛男は肩を怒らせてあたしにつかみかかってこようとする。

・・・つか、どんだけ自分の眉毛好きなんだよ。

そのつかみかかってくる手を払いのけると、あたしはそのまま路地裏に向かつて走る。眉毛の復讐に燃える男は、こちらの思惑通り追いかけてきてくれた。

・・・よし。さて、あとはどうやって倒すかだ。

「おねえちゃん、行き止まりだなあ？」

すごく楽しげな声に、振り返る。

・・・そう、確かに、あたしの後ろは壁。目の前には、にやりと笑う男が二人。

普通に考えて、勝ち目はない。

震える声で、あたしは懇願した。目に、涙がたまる。手が、ぶるぶると震えた。

「お願いです。さっきは・・・す、すみませんでした。助けて・・・助けて、ください」

「さっきまでの強気の態度はどこにいったんだよう、なあ」

眉毛男は顔にいやらしい笑みを貼り付けて、あたしの肩をぐいっ

と下に押す。

その力のまま下に崩れ落ちると、男は上から見下ろしてにやりと笑った。

「生意気なこといいやがるからわりいんだ、死にやがれ」

その声とともに、鋭い銀色があたしの身体に――

「ばーか」

刃はあたしの身体に触れることはなく、男はふらりと倒れた。

あたしを上から押さえつけていた男は、いわば無防備。

油断している下半身を払いのけ、思い切り床に押し倒したあと、隠し持っていた短剣の塚で頭を殴ってやれば、男は簡単に気絶した。

「さ、どうする？」

残る出っ歯男に微笑みかけると、彼はひいっと情けない叫び声をあげると、担いでいた麻袋を放り投げ、走り去っていつてしまった。

あたしの頭の中で、音楽が流れる。

たららったらー

ルイの攻撃力が3あがった！

ルイの演技力が5あがった！

ルイの良心が3さがった！

・・・攻撃力とか演技力以前に、良心という何よりも大切なものをなくしてる気がするの、は気のせいかしら？

第四話「進化という名の退化」(後書き)

ルイちゃん、逃げ出すかと思ったら・・・まさかの、S。

・・・いや、違うんですよ！ルイちゃんは、あくまで、弱い女の子です(あくまでも言い張る)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5838z/>

泣き虫な魔法使い。

2011年12月19日21時52分発行